

列王記第二 25 章 13 – 17 節 「破壊される神殿」

1 A 列王記の始まりと終わり

2 A 神の神殿 1コリント3：10 – 17

1 B イエス・キリストの土台

2 B 各人の働きの真価

3 B 隠れたはかりごと

本文

私たちはついに、列王記の学びを終えます。午後 24-25 章を一節ずつ読みます。今朝は 25 章 13-17 節に注目したいと思います。

13 カルデヤ人は、主の宮の青銅の柱と、主の宮にある青銅の車輪つきの台と、海とを砕いて、その青銅をバビロンへ運んだ。14 また、灰つぼ、十能、心切りばさみ、平皿、奉仕に用いるすべての青銅の器具を奪った。15 また、侍従長は火皿、鉢など、純金、純銀のものを奪った。16 ソロモンが主の宮のために作った二本の柱、一つの海、車輪つきの台、これらすべての器具の青銅の重さは、量りきれなかった。17 一本の柱の高さは十八キュビトで、その上の柱頭も青銅で、その柱頭の高さは三キュビトであり、柱頭の回りに網細工と、ざくろがあって、それもみな青銅で、他の柱も、網細工までも同様であった。

エルサレムがバビロンによって、破壊されました。バビロン捕囚は合計三回ありましたが、第二次捕囚のときに、バビロンの王は神殿の中にある金の用具を取って行きました。「彼は主の宮の財宝と王宮の財宝をことごとく運び出し、イスラエルの王ソロモンが造った主の本堂の中のすべての金の用具を断ち切った。主の告げられたとおりであった。(24:13)」金が取られたのが紀元前 597 年、そして今、第三次、最後のバビロン捕囚が来ました。この時に神殿をバビロンが破壊したのですが、青銅で造ったものをことごとく取って行きました。

1 A 列王記の始まりと終わり

列王記を一言でまとめるなら、「神殿で始まり、神殿で終わった」ということでしょう。ソロモンが王となり、彼が父ダビデからゆだねられた事業は神殿建設でした。神殿を七年もかけて建てて、そこで主に礼拝を捧げるようになりました。ところが、異なる神々に仕えるようになり、敵に虐げられ、そしてついに捕え移される身となったのです。神殿を建設したけれども、神殿を破壊されることによって終わったということです。

ソロモンが神殿を建てた時に特徴的だったものの一つが、青銅による器具をいろいろ造ったということです。列王記第一 7 章 15 節から始まります。ソロモンは、ツロにいる青銅の細工師を雇い、その精巧な細工を任

せました。特徴的なのは本堂または聖所の前にあった、二本の柱です。その柱頭に、格子細工の網を作り、ザクロの形をしたものを二百個作りました。ユリの花の細工もあります。これを本堂の玄関広間の右と左に立て、一方にヤキン、もう一方にボアズという名を付けました。それぞれ、「彼は立てる」「力をもって」という意味です。主が力をもって立ててくださっている、という意味です。

それから祭司たちの手足を洗うところは、「海」と呼ばれて非常に大きな水溜でした。その下に牛の形をしたものが十二頭います。それからいけにえのための台も十台作り、これらはみな青銅で出来ていたのです。これらのものがすべて解体されて、バビロンに運ばれていったのです。

2 A 神の神殿 1コリント3：10－17

主はこれらのことをご自分の民への懲らしめとして行われました。バビロンが神殿のものを取って行くままにされました。それは彼らが主に向かうことなく、他の神々を拝み続けたからです。

私たちは、イエス・キリストが十字架につけられ、よみがえられ、天に昇られたことを知っています。そしてイエス様は聖霊を私たちに下さいました。ご自分の名を信じる者に対して、聖霊は内に住んでくださいます。それゆえ、信者の体は「聖霊の宮」と呼ばれています。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。（1コリント6:19）」キリストが血を流されて、聖霊が与えられてからは、神の霊は建物の中にはなく、信者一人一人の体に、また信者たちがイエスの名によって集まるところに親しく住んでくださっています。

したがって、神殿が破壊されたというイスラエル史における悲しい出来事は、私たち信者に対する警告でもあります。この体において、私たちが何を主に対して行ったのかが問われます。そこで今日は、コリント人への手紙第一 3 章 10-17 節を読みたいと思います。

10 与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。11 というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。12 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、13 各人の働きは明瞭になります。その日それがそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。14 もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。15 もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。16 あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。17 もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。

1 B イエス・キリストの土台

パウロはコリントにある教会に対して、自分が建築家であると言っています。けれども、それは基礎工事の建築家です。パウロが行ったのは、コリントにおいて福音を語り、イエス様を信じた人々に御言葉を教えていったことです。彼はコリントで腰を据えて、教えていきました。ですから、すべての信者にとって、自分の立つよりどころはイエス・キリストです。イエス様との関係、親密で、かつ固い関係が今後の霊的成長の全てを決めます。

コロサイにある教会に彼はこう書きました。「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。（2:6-7）」そして、ペテロは第二の手紙の最後でこう言っています。「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。（3:18）」イエス様との毎日の出会い、その積み重ねが私たちの全ての土台になります。

そして具体的には、この前学んだ、律法の言葉を聞いて激しく泣いたヨシヤに見られたように、イエス様と出会うには、その御言葉を自分のものとして受け入れていく営みが必要です。イエス様が、御言葉を聞いて、それをよく理解して自分のものとして生活に適用する人と、そうでない人の違いを、岩と砂地の上に建てた二つの家に例えています。マタイ 7 章 24－27 節を読みます。「だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」

私たちは、今は月浜海岸に救援活動、そして復興支援活動に行っていました。あの松島の奥、名前も奥松島と呼ばれる風景の名勝地であり、その小さな海岸は地元民が休日に行く所でした。そこに津波が押し寄せたのです。初めて行った時は 2011 年 4 月、ほとんど全ての民宿の家屋が押し流されていましたが、ほんの数軒、被害を受けながらも流されていなかったところがあります。それが全て、「岩の上に建てられていた」ものです。今はその一軒に、私たちの支援している宣教師夫婦が住んでいます。彼らの家で、私はここの箇所を広げて、現地の人々にお話ししました。イエス様の言葉を聞いて、それを行なう者が岩の上に家を立てます。聞いているだけでは立ちません。多くの人が聖書の話聞いて納得し、喜んでいますが、自分の生活や人生に具体的に適用していないので、何かが起こると倒れてしまうのです。

2 B 各人の働きの真価

そして大事なものは、その後の働きです。これが、イエス・キリストの上に建てられると話しています。先ほど話したように、私たちの体、また信者の集まる教会が、神の聖霊が宿る宮です。この時に、パウロが言うには、いろいろな材料で作っていると言っています。見た目には確かに、家が建っているようです。「金、銀、宝石、木、

草、わらなどで建てる」とあります。けれども、材質が違います。これはちょうどあのおとぎ話、「三匹の子豚」と同じ内容です。一匹目の子豚は藁で家建てるが、狼が藁の家を吹き飛ばし、子豚を食べました。二匹目の子豚は木の枝で家建てましたが、同じようにして狼に食べられてしまいました。三匹目の子豚は煉瓦で家建てました。いくら息を吹きかけても、家はびくともしません。狼は煙突から入ろうとしましたが、その子豚はその下に熱湯の鍋を用意して、大やけどをして狼は逃げていきました。

ここコリント人への手紙の場合は、火をもって家が試されます。「各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をたぬすからです。」とありますね。この「その日」というのは、イエス・キリストが戻ってこられる時です。イエス・キリストが天から戻ってこられます。「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。（ヨハネ 14:2-3）」イエス様が、私たちのために天における報いを用意しておられます。その報いを携えて、天から降りて来てくださいます。空中にまで引き上げられた教会はこの方にお会いします。

けれども、その時、私たちはこれまで行ったことの評価を受けてから、主に受け入れられます。「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあった行為に応じて報いを受けることになるからです。（2 コリント 5:10）」この裁きは、罪に定められるための裁きではありません。キリストを自分の救い主として受け入れた者は、罪に定められることは決してありません。ここの裁きは、競走で賞をもらうときの、審判の与える評価です。私たちがこの地上で行ったことに対して、それを主に対して行ったものはすべて、キリストの裁きの座で報いを受けます。それはタラントの喩えの中に書かれています。五タラント、二タラントをゆだねられ、それぞれ商売でもうけた者に対して主人は、「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。（マタイ 25:21）」と言いました。このような褒美としての報いを、キリストの裁きの座において受けます。

もし私たちが、表向きはキリスト者のようにふるまっているけれども、キリストの目の中でその真価が試される時、私たちの働きはそれでも残っているのでしょうか？これは私たち一人一人が吟味しなければいけません。

3 B 隠れたはかりごと

キリストが私たちが裁かれる基準は何なのでしょう？礼拝に欠かさず出席することでしょうか？どれだけ数多くの人をキリストに導いたかによるのでしょうか？いいえ、同じコリント人への手紙第一で、パウロはこう説明しています。「ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。（4:5）」闇の中で行っていること、あるいは心の中のはかりごとが明らかにされる、と言っています。つまり、だれも見えていないところで行っている良い行いに、その人の真実が現れるということです。

そして心の中の動機がどうだったかについて、明らかにされるということです。

イエス様は、当時、この人たちこそが神の国に一番に入れるとしてパリサイ人、律法学者であるとユダヤ人が考えているのを、真っ向から否定されました。彼らの良い行いは、人に見られるためのものだと言われるのです。「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。（マタイ 6:1-2）」もし、人からのほめ言葉を求めていたら、そのほめ言葉が報いとなり、天には報いは残されていないということです！もし私が、「明石先生、今日の説教はすばらしい！」というほめ言葉を聞いて、自分がそれで有頂天になったら、その言葉が報いで天には何も残されていないのです！

続けて読みますと、私たちが確かに主に対して行っているかどうかは、隠れた行いに如実になることをイエス様はおっしゃっています。「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。（6:3-4）」誰も見ていなくても、天におられる父が私を見てくださっていると思って、それで良い行いをすることができます。だから、その良い行いは本物です。神に対して行っているものだからです。

パウロが言いました。「なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。（新共同訳 2 コリント 5:14）」キリストの愛に駆り立てられている時、この愛が、私たちが良い行いをする動機になっているとき、主は豊かに私たちに報いてくださいます。その他の動機、自分の行いがよく思われたい、または他の不純の動機があった、または隠れたところでは悪いことを行なっているのに、人に対しては霊的に見せているなど、そのようなものは火によって取り除かれます。

けれども、神が私たちを愛してくださいました。キリストが私たちの罪のために死んで、罪の供え物となってくださいました。だからこのすばらしい愛に感動して、この愛に応答したいと願います。それで神の命令を守ります。この愛が、キリストが来られる時に報いとして受け入れられるのです。したがって、すべてが神の愛なのです。神との愛の関係なのです。それ以外はありません。私たちは、このことについて複雑に考えるはいけません。私たちがイエス・キリストを土台として家を建てる時に、ただ神の愛だけが火に通されてもなお残る働きになるのです。

イエス様を信じていると言っても、このような真実な愛を持っていなかったという方はおられるでしょうか？ 今からでも遅くはありません。この愛に立ち返って、やり直しをしてください。「あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたか思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。（黙示 2:5）」